



# 谷川岳

新開世音

真夏の日差しが降り注ぐ中、智恵子は谷川岳の頂上にいた。先ほどまで涙が止まらなかったけれど、ようやく気持ちが落ち着いてきた。高ぶった気持ちを落ち着かせようと大きく息を吸い込んだ。2人の娘と手を繋いで、眼下に広がる景色に自身の人生を重ねていた。途中の険しい山道もこれまでのつらい結婚生活も、今自分は見下ろしている。

「この山に登れたら、きっともう離婚しても大丈夫。」そう智恵子は自分に言い聞かせた。娘の百合も梨花も母の手を強く握っている。小さい頃から一緒に山を登ってくれた娘たちが、智恵子を強くしてくれた。

「離婚だ！別れるんだ！」智恵子にとって「離婚」という言葉は希望の塊だった。

下山の道は輝いていた。目に入る木漏れ日や鳥たちのさえずりや全てのものが自分をお

祝いしてくれているようだった。

智恵子の夫の達正は容姿端麗で、言葉遣いも仕草も紳士的だった。

2人の出会いは、ミニシアターと隣接している小さなカフェのバイトだった。バイト先での達正は料理も接客もベテランで、バイトが初めての智恵子にとって頼りになる先輩だった。加えて達正は知識も豊富で遊びにもたくさん連れて行ってくれた。智恵子は真面目な性格で、見た目は可愛らしい容姿をしていたが派手な遊びには興味がなく、地味な毎日と智恵子なりに楽しんでいた。映画や読書には智恵子なりのこだわりがあり、時間がある時にはミニシアターで映画を楽しみ、カフェで覚えた料理を作ったりと智恵子の日常は穏やかで優しい時間に満ちていた。

そんな智恵子が華やかな達正に惹かれ、特別な関係になるのには時間がかからなかった。智恵子は短大卒業後、東京都内の金融会社に勤めた。OL生活は充実していたが、同級生が家庭を持ち始めると結婚を意識するようになり智恵子が27歳、達正が28歳の時に結婚を決めた。智恵子は結婚を機に会社を退職し、通信教育で保育士の資格を取った。新居は2DKのマンションと広くはないけれど、智恵子の好みが詰まった空間だった。手作り

のリネンのカーテン、深いブラウンの丸い円卓のテーブルセット、食器は華やかなものではなく趣のあるアースカラー、窓辺にはコーヒーマグの木が置いてあった。そこは智恵子がバイトをしていたカフェのインテリアにどこか似ていた。

だが幸せいっぱいであるはずの智恵子の結婚生活は、底無し沼の上に立っているような日々の連続であった。結婚してすぐ達正は、智恵子の知っているバイト先のチーフの後藤と一緒に配膳人材紹介所を立ち上げたが、それを機に達正の人生は狂いはじめた。

達正は長女の百合が智恵子のお腹に出来た頃から家に生活費を全く入れなくなった。後藤に確認しても、「給料の支払いはしている、達正の方で仕事で精算しなければならぬことがあるみたいだ。」という返事だった。達正は会社の事務所に泊まり込み、家に帰らなくなったためコミュニケーションも取れず、生活費は智恵子の実家に頼る日々が続いた。

お腹のこどもが大きくなるにつれ、どうしようもない不安に襲われた。本当だったら命の誕生を達正と一緒に楽しみに待ちたかった。ひとりぼっちでこのお腹の子を守っていいのか…不安しかない妊娠生活を智恵子は懸命に乗り切った。達正はいつ生活費を入れてくれるか分からない中、出産準備もしなければならなかった。智恵子は洋裁が得意だった

のが幸いして、なんでも布を買ってきてひたすら縫った。オムツも縫った。

智恵子は里帰り出産し無事に長女の百合を出産したが、しばらくは生活費が貰えなかったため、実家から帰ることができなかった。

百合が生まれてしばらく経つと、仕事が落ち着いたのか達正は家に帰る日が多くなり、育児を手伝うようになった。達正の収入は不安定ではあったが、智恵子は百合にきょうだいを作ってあげたかった。何とか節約と工夫を重ね、3年後次女の梨花が誕生した。智恵子は百合が小学生に入学すると取得した保育士の仕事に就き、少しでも安定した収入の確保に全力を挙げた。そして、達正は後藤との共同運営に見切りをつけ、配膳人材紹介所の自身の会社を立ち上げた。

2人の娘はすくすく育った。百合は活発で楽天下、まっすぐに男まさり、近所では気の強さで公園でもかなり有名だった。一方梨花は優しくおっとりした性格で百合とは真逆なことだった。梨花が小学生に上がる頃から、達正はまた会社に寝泊まりすることが多くなった。智恵子にとって百合と梨花の子育ては楽しかったけれど、ママ友との会話から自分の結婚生活に疑問を持つようになった。

他の家族には当たり前のようにある安定した生活費、育児に協力してくれる父親の存在。智恵子は他の家族が羨ましかった。智恵子は幸せそうな家族で溢れている休日のショッピングセンターが大嫌いだ。その幸福感に満ち溢れた空間に智恵子は一人浮いている感じがした。しかし百合も梨花もたまにはフードコートで好きなものが食べたいのだ。

仕方がない：でも足を踏み入れたショッピングセンターはいつも智恵子に知り合いの幸せな家族との遭遇をもたらす不快な場所だった。智恵子は何も買えなかった。何も食べられなかった。娘たちに食べさせることで精一杯で、娘たちの向かいに座って水で空腹を凌ぐしかなかった。幸い百合と梨花の洋服や身の回りのものは達正の両親が事あるごとに送ってくれた。達正の父は経営者で、達正はお金は十分にある裕福な家庭で育ったのだ。

智恵子は達正がどんな状況になったとしても、この義理の両親がいるなら大丈夫だとかかで思っていた。その一方で達正への信頼感は日々薄れていくばかりだった。智恵子は心のどこかで「将来自分ひとりで百合と梨花を育てていくことになるのではないか」という思いが渦巻き始めていた。それは考えるだけで絶望的に不安で漠然としていて、でも確かな勘のようなものだった。

智恵子は百合と梨花を連れて登山を始めた。将来1人で娘2人を育てることになった時のために、自分自身を強くするのだ。登山に必要な計画性、実行力、ちゃんと帰って来れば強くなって自信もつく。一番最初は高尾山から始め、毎年4〜5つの山を登った。山に登るたびに「将来1人でも娘2人を育てられる」という自信が強くなっていった。

智恵子にとって苦しいばかりの結婚生活の中でもほんの少しはいい事もあった。夏休みや冬休みになると達正は車を出し、4人で家族旅行へ出かけた。冬休みは達正の実家に帰省がてらスキーを楽しみ、夏は黒部ダムや葡萄狩りなど（達正はカナヅチのため水遊び以外）積極的にバカンスを楽しんだ。智恵子にとって長期休みだけがホッと一息つけるひとときだった。達正もこの時ばかりは時間を共にし、智恵子が求める幸せな家族が旅先にはあった。

達正の会社は得意先の倒産と共に徐々に傾き、達正の夜間のバイトなしでは生活できなくなっていた。夜間のバイトといってもキャバ嬢の勤務後家まで送り届けるというママ

友の前では言いにくい仕事だったが、そのバイトも何らかの事件と関連があり警察が取調べに家まできて大騒ぎになって辞めた。達正の会社は倒産し、やがて家に引きこもるようになった。何ヶ月か引きこもり、その後も達正は職を転々とし、また引きこもるを繰り返した。職についてもすぐに「会社で金が必要になった」と会社絡みの言い訳で智恵子の職場までお金を取りに来るようになった。

智恵子は悶々とした。働いても働いても稼いだお金は生活費でもなく貯金でもなく、達正の補填に消えていくようになった。

ある日智恵子がポストを覗くと、消費者金融業者から催促書が届いていた。智恵子は金融業出身である。「この催促書は決して一枚で済まされる問題ではない。しかも催促書が届くということは支払いが滞っている状態なのだ：まだ知らない借金が何箇所もあるはずだ：」当時の年利は上限29・2パーセント。もし残高が100万なら、1年間で支払う利息は29万円にもなるのだ。達正の様子を見てみると借入は100万円ではすまないだろう。もし300万円あったら1年間の利息は約87万円。利息だけでも毎月7万円以上になってしまう。残高によってはもう智恵子の力ではどうしようもできなかった。不安で心臓がはち切れそうになりながら、達正の両親に相談するために受話器をとった。

達正の両親はすぐに甲府から駆けつけた。そして智恵子は達正の両親から耳を疑うような話を聞いた。

「達正には何冊通帳を渡したかわからないくらいよ。そうね、五センチくらいはあったかしら。智恵子さんたちの生活費に必要だからって言って。それなのにまだ借金があるだなんて、一体どうなっているの？」

智恵子は頭の中が真っ白になりつつ、もう顔もこれ以上ないくらいの興奮と怒りで真っ赤になりながら「この古い住居を見てください。そんな大金を注ぎ込んでるように見えませんか？おかげさまで娘たちは頂いたブランドのワンピースやセットアップやらで華やかな衣装を着ているけど、私のこの全く垢抜けない洋装を見て仰おっしゃってますか？一体何に使ったのか私が聞きたいくらいです！」と冷静に現状を説明し、その場を切り抜けた。

その後借入に関して達正に問い詰めても、借金は倒産した会社が原因の一点張りで智恵子が納得する答えは得られなかった。借入は40万円を超えていた。幸い達正のご両親は今回限りという条件で消費者金融からの借入は立替ってくれたが、その後も達正は、事あるごとに智恵子からお金を用立ててもらっていた。

智恵子の中で「もしかしたら1人で百合と梨花を育てる」という漠然とした不安は「離婚して絶対に1人で百合と梨花を育てる」という決心に変わった。「離婚」することによって、稼いだお金は着実に生活費と貯蓄になるのだ。このまま「離婚」しなければ、生きている間は永遠に自分の稼いだお金は達正の元に消えていくわけだ。決して自分の手元には残らずに……。こんな恐ろしい事があってなるものか。何としてでも「離婚」して幸せになるのだ。もう一度人生を取り戻すには「離婚」しかない。不安と失望の闇をさまよっていた智恵子の心に「離婚」という明かりが灯った。

「離婚」と言っても離婚したらおしまいではない、百合と梨花と一緒に生きていく生活を確かなものにしていくためには毎月金銭面での協力が必要だ。だが達正は毎月生活費もろくに捻出ひきだできない男だ。自分との話合いに誠実に向き合ってくれる訳がない。もっと強制力があって何か確実な手段はないか……。百合と梨花は部屋でテレビを見ていた。ドラマか……。こどもが出来てからゆっくりテレビも見れなかった智恵子の目に飛び込んできたのは、弁護士ドラマだった、ドラマの中の弁護士は離婚問題に奮闘していた。智恵子は「神様も離婚を勧めているんだ。」と思った。

智恵子は「離婚」という目標を弁護士に委ねた。弁護士費用は智恵子の両親が用立ててくれた。弁護士の存在はこれまでたった一人で戦ってきた孤独で不安で惨めで逃げられない道にも出口があることを実感させてくれた。

離婚手続きに際して、まず智恵子が用意しなければならなかったのが離婚事由だった。これまでの金銭的なやり取りを全て書き出し、表にし、書類として具体化した。

決めていかなければならないことが沢山あった。親権や財産分与、面会交流、慰謝料、養育費…。達正は「離婚」に対して自らの感情を見せることはなかった。まるで第三者が話を聞いているように、親権についても主張する事なく、ただ智恵子の要求を淡々と飲みこんだ。

離婚は弁護士によって着々と進められていった。離婚に向けての決定事項は、親権は智恵子に。慰謝料はなし。養育費は娘2人が大学を卒業するまで。面会はお盆休みとお正月の2回と達正の仕事都合上、不定期に年10回まで。達正の両親から購入してもらった車は達正に。離婚の条件が全て決まり、あとはこどもたちに説明するだけとなった。

夢にまで見た「離婚」が成立するためには百合と梨花の気持ちにも寄り添っていかねればならない。智恵子にとっては生きる希望である「離婚」でも、こどもにとっても希望とは限らない。その時、長女の百合が中学2年生、次女の梨花が小学校5年生になっていた。智恵子とはかくこども達も納得した上で離婚したいと強く思っていた。

智恵子が百合と梨花に離婚を切り出すと、長女の百合は、

「お母さんのことはよく見ていたから、大丈夫だよ。」

サラッとそう言った。百合は母親の智恵子が達正に散々振り回されているのを見ていた。百合自身も家が貧しいという理由で我慢することが沢山あったし、達正が時々家に引きこもる様子を疎ましく思っていた。夜中に聞こえる夫婦の声が穏やかな話し声ではないこともちやんとわかっていた。

「寂しくないの？」

「だってほとんどいなかったし、いたとしても部屋から出てこないし…」

「いめんね。」

「お母さんが謝る事じゃないよ。私がいるから、お母さん1人じゃないよ。もう十分わかっていたし、いつかな〜?くらいに思っていたよ。」

智恵子は涙が止まらなかった。やりきれない気持ちをぶつけてしまうのはいつも百合だった。そんな百合は智恵子に真っ直ぐに向き合ってくれた。時には反抗し、時には智恵子の肩を抱き慰めてくれる時もあった。

次女の梨花は責めるでもなく、怒るでもなく、ただただ目に涙をいっぱい溜めてじっと智恵子を見つめた。言葉にならない思いは父親への思いそのものだった。どうして他の家族のようなお父さんではなかったのだろう。私にとっては優しいお父さんなのに、どうして…。

梨花の涙に智恵子も困惑した。こどもというのは生きることにおいて無力だ。親の手の中に自分の人生が握られている。

「そうだよ。寂しいよね。梨花のお父さんだもんね。」

「うん。」

「お父さん優しくかったよね。遊びに連れていってくれたし、旅行とかも行ったよね。」

「うん。」

「梨花にとってのお父さんは変わらないよ。ずっと梨花のお父さんだよ。」

「うん。」

「でもごめん。お母さんはお父さんともう一緒にはいられないの。」

「…」

数日間梨花は無言だった。まだ無邪気な小学5年生の梨花にとってお父さんがいなくなるということの重さを、智恵子は解っていたつもりが実は解っていなかったのだ。ただ離婚したい一心で進んできたけれど、百合と梨花にとってたった1人のお父さん。運動会でビデオ撮影してくれたお父さん、応援の音がビデオに入ってめちゃくちゃうるさくて、2人とも笑ってたな。みんなでスキーに行ったら、お父さん1人ですごい転んで笑われて、それなのに娘の前ではカッコつけてたな…。智恵子の頭に達正のお父さんとしての顔が次々と浮かんだ。達正はこどもたちにはずっと優しくかった。あまり家に帰っては来なかったものの、帰ったきた時には止まらない2人のおしゃべりに耳を傾け、2人を抱きしめた。

数日後、智恵子と百合と梨花は山に登った、「離婚」することを目標にして、登る度以前より少しでも高い山に挑戦してきた。離婚しても1人で立派に子育てできるように、最

初から計画を立ててちゃんと登り切って下山出来たら、私は絶対に離婚しても2人を幸せにすることが出来る。自分に課した課題でもあった。梨花は登っている時ずっと無言だったが山頂に着いた時、ポロポロ涙を流しながら「離婚わかった」と呟いた。智恵子も百合も泣いた。山頂の晴れて澄み切った景色と涙が混ざり合う、鳥が変な声で鳴き出すと百合と梨花は急に笑い出した。智恵子もつられて笑い出した、笑いながらも涙は止まらなかった。

「こんなお母さんだけで一緒にいてくれてありがとう。こんなお母さんだから解ったことがあるんだけど聞いてくれる？」

2人ともこの先、間違えてしまうこともあると思う。間違えたらおしまいにならないで、自分が幸せに思う道を諦めないで見つけてほしい。間違えたら引き返せばいい。違っていると戻ったら何回だってやり直せる。自分が選んだ道で精一杯頑張つて。お母さんは離婚を選んだけど、家族みんな幸せになるようがんばるね。」

登山は沈黙だったけれど、下山はみんな吹っ切れたように笑っていた。

達正は家を出ていった。こども達には何も言わずに。こどもの前では相変わらずカッコ

つけたかったのかもしれない。カッコつける言葉が用意できなかったから無言で出て行ったのかもしれない。それとも情けない姿をこれ以上見せるのは嫌だったからだろうか。結局達正の本音は聞けなかった。

いつだってすぐ自分の都合で出ていける達正が、智恵子はいつも羨ましかった。智恵子はどんなにこの家から逃げたくても逃げられなかった。幼いこどもたちを置いて出て行くことなんて出来なかった。智恵子はボソッと呟いた。「出ていけていいよね。私はどんな時だって、2人の娘を育てるためにこの家から離れられなかったのに。」

離婚してしばらくはぼんやりした日々が続いた。大きなエネルギーを使い果たした脱力感と、もう毎月達正の補填にビクビクしなくてもいい大きな安心感と、憎悪に変わってしまった達正の存在からの開放感。智恵子にとって幸福そのものだった。

「お母さん、明日朝早いから起こしてー。」

時は過ぎ、百合の成人式の日がやってきた。百合は達正の顔立ちにそっくりになった。その父親の面影は、今でも智恵子の記憶に新しいけれど遠い思い出になっていた。苦しかっ

たはずの日々はいつか智恵子の中で「大貧乏・大笑い話」に変わっていた。

卒業式に古い黒い革靴を引っ張り出して履いたら、式の途中から革がバラバラになってしまつてこどもが泣いたとか、パン屋さんに行つたら、並べてあつたパンを梨花が勝手に食べちゃつたとか、智恵子は保育士の仕事の他に子育ての相談員を担い、自分の経験談をおもしろおかしく話しては悩んでいるお母さんたちをよく笑わせてきた。

成人式の朝はよく晴れた青空で、一月の張り詰めた冷たい風が吹き荒れていた。

早朝の美容院から、成人式、同級生たちとの食事会の梯子はしごと百合の特別な日の運転手は達正だった。朝一番珍しく遅刻もせず時間通りに玄関のチャイムがなつた。「よっ！」とまるで昨日も一緒にいたみたいな達正の挨拶と共に1日がはじまつた。

美容院で着付けをしてもらい、百合は深緑の振袖を纏まとい成人式へと出発した。

智恵子と達正はその背中を見送つた。

長い年月は2人の間を穏やかにしていた。あの張り詰めた怒りも切り詰めた心の不安も、もう何もなく、ただ2人の娘の親として肩を並べていた。